日本尊厳死協会プレゼンツ 日本初の死生観の番組

「My LIFE My CHOICE!!」のご視聴を！

医学博士　**長尾和宏**

死という言葉を忌み嫌う

人は100％死ぬ。どんなに長生きしても必ず死ぬ。どんなに医学が発展しても死ぬ。病気、事故、老衰…。しかし多くの人は、死は遠いものだと勝手に思っている。実際は今日1日無事に生きて過ごすことすら100％ではないのに。「必ず明日はある。来年も再来年も10年後も生きているはず」と勝手に思っている。

ほぼ100％の人にとって死は常に他人事である。病人や突然死の訃報に接して喪に服しながら、同じことが近い将来自分にも起きることには想いが及ばない。つまり自分事ではない。

親鸞は「散る桜、残る桜も散る桜」と謳った。物心ついた時から死体がころがる京都・河原町を歩いていたからなのか。しかし現代日本人にとって死に接する機会は少ない。病院での隠された死が8割。死は「穢れ」であり忌み嫌うべき対象である。病院の病室にお坊さんが来たら「縁起が悪い」と怒る家族がいる。でも死んだらそのお坊さんにお経をあげてもらう。まあ仏陀の仏教を勉強せず葬式仏教だけに専念してきたお坊さんには響かない話だろうけど。

もし日常会話の中で死の話をしたら「縁起でもない」とお叱りを受ける。メディアにおいても死は放送禁止用語だった。たとえば「どう死ぬか」などの死生観を扱う番組は、放送局の考査にひっかかり制作できなかった。かくして人生でいちばん大切なテーマである「死」はタブーとされる社会の中で生きている。その結果、医療の現場では終末期医療に関して時に混乱が起き国会での終末期議論は10年以上、遅々として進展していない。

前半は徹子の部屋。後半は死生観

日本尊厳死協会は1976年に設立された延命治療お断りという人が集う市民団体だ。47年もの歴史をもち現在は公益財団法人である。緩和医療は望むが延命治療を望まない、いわゆるスパゲティ症候群になるのは御免だ、と希望する人が自分の希望を紙に書いたものをリビングウイル（LW）と呼ぶ。そのLWの普及啓発を行うだけの団体である。現在、約8万人の市民が登録しいわゆる終末期医療に関する自分の希望を文書に書いている。LWは日本においては法律が無いので公証役場や自治体や病院・施設の書式で自由に書いている人もいる。LWを書いている日本人は約3％程度と推定されているが、多くの市民だけでなく多くの医師がその言葉すら知らない。

そこで日本尊厳死協会は、メディアでも一般市民にLW啓発を始めた。先陣を切ったのがTBSラジオの「My LIFE My CHOICE!!」という番組である。毎週土曜日に放映されている。安藤弘樹アナが司会を務め、毎回、著名なゲストを迎えて番組の前半は、「徹子の部屋」のように人生の歩みを語って頂く。そして後半は「死」について自由に語って頂くという内容。「死」は大切な人の死であったり自分自身の望む最期であったりだ。これまでの出演者を見渡すと石坂浩二、デヴィ夫人、中村雅俊さんのような世代だけでなく、ミッツマングローブさんのような40代まで各年代層に及ぶ。番組の最後には会員やリスナーからの質問に北村義浩理事長や私が答える質疑応答コーナーもある。

TBSラジオは土曜日の昼であるが聞き逃した人はRadikoで聴くこともできる。実は協会のYou Tubeでテレビのように「動画」として観ることもできる。1時間以上に及ぶ内容を30分に編集したものがラジオだがYou Tubeではほぼ全編を観ることができるので時間がある方にはこちらの方がお勧めだ。視聴法はスマホかパソコンで日本尊厳死協会のホームページを開き、「協会ニュース」をクリック。6段目にTBSの「My LIFE My CHOICE!!」と表示されるのでそこをクリックして頂きたい。

https://www.o-kinaki.org/14975/

このサイトは誰でもいつでも何度でも無料で観ることができるので、是非1度、ご覧頂きたい。また有意義だと感じたらお知り合いに紹介して頂きたい。自画自賛になるが、日本で死生観を扱った唯一の優良番組だと思う。

死生観を自由に語るには

国会には約20年前から終末期医療に関する超党派の議員連盟がある。前回詳しく書いたようにコロナ禍の間は休んでいたが昨年から山東昭子議員を会長とする勉強会が再開された。加入している国会議員は約100名である。

昨年12月の議連の総会では「なぜ終末期の議論が日本では進まないのか」という質問が出た。「それは難病や障碍者の団体の反対が強すぎて議論が進まなかった」という意見が出ると、別の議員からは「特定の患者団体からの反対意見だけで議論を停滞させてはいけない。国民全体の利益を逸する可能性がある」という発言が出た。筆者は10年前から、本議連の勉強会に出席してきたが、難病や障がい者団体のシュプレヒコールのなか開店即閉店のような集会を何度か経験した。難病や障がい者の団体は呼吸器を装着した患者さんが私を取り囲み「人殺し！」と大声で何度も叫ばれたことを思い出した。

しかしまずは、死について自由に語れる世の中の空気が大切ではないのか。法律云々の前に医学会でも国会でも自由に議論できる空気が無い限り、一歩も前に進めないだろう。その意味では、TBSの「My LIFE My CHOICE!!」もまだ突っ込み不足かもしれない。しかし日本で初めてメディアに風穴を開けたばかりである。是非、ご視聴のうえ忌憚のないご意見を賜りたい。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

協会のYOU TUBEでも視聴をTBSの「My LIFE My CHOICE!!」は、

https://www.o-kinaki.org/14975/

長尾和宏
（ながおかずひろ）

医学博士

１９５８年生まれ。医学博士。公益財団法人・日本尊厳死協会副理事長。１９９５年に尼崎市で開業した長尾クリニックを６５歳の誕生日に定年退職。今後は音楽・映画・舞台など文化活動を通じて、新たな形で医療情報を発信していく。在宅医療、終末期医療、コロナ問題、認知症問題、薬の問題など幅広いテーマで著書を出版。ベストセラーに『平穏死１０の条件』『抗がん剤１０のやめどき』、『薬のやめどき』、『痛くない死に方』（映画原作）、『病気の９割は歩くだけで治る！』シリーズ、『小説 安楽死特区』『ひとりも、死なせへん』など。

長尾の日常を追ったドキュメンタリー映画に『けったいな町医者』、製作に関わった映画に『記録映像　ワクチン後遺症』『夜明けまでバス停で』など。まぐまぐ！の有料メルマガ『痛くない死に方』、ニコニコ動画『長尾チャンネル』を毎週配信中。独自の視点でその時々の社会問題に鋭く切り込み、好評を得ている。

月刊公論202403［00-00］医療最前線.indd 全ページ
2024/01/29 14:31